

# 山と博物館

第 7 卷 第 6 号

1962年6月25日



八方尾根より不帰岳

撮影 高橋秀男

大町山岳博物館

# 北ア静かなコース

## 船窪岳

剣, 鹿島, 白馬と北アルプスの大パノラマを望むことが



針ノ木峠より針ノ木岳を望む

大糸線で大町駅への下車準備をする頃、車窓に映える北ア連峰を望んだ時、どっしりとした蓮華岳が裾を引きその左に美しいピラミット型の端整な北葛岳が続き、平らな七倉の稜線がそれを補ってゆるやかに続いているのを望むことが出来る。北方にそびえる鹿島槍の峻険さには及ばないが、そのゆるやかな山容に誰もが心引かれることであろう。船窪岳は安曇平から望むことは出来ないが七倉岳の北部に位する2,290米の山である。

針ノ木から船窪を経て烏帽子へのコースは、後立山と烏帽子連峰とを結ぶ重要な縦走路であるが、今なお訪れる人も少なく昔のまゝの静かな雰囲気包まれている。北アルプスをくまなく歩き廻ったという人でも、船窪へ行ったことのあるという人は少ない。白馬から槍ヶ岳の稜線上の中間にあって今なお訪れる人が少ないといえれば一般登山者は不思議に思うかもしれないが以前は小屋がなかった為後立山と烏帽子連峰の間にあって忘れられていたのかもしれない。

こゝは蓮華の大下り、北葛乗越、船窪乗越等の名称通り高低差があるので体力を消耗する向きがある。しかし他のコースに比べ人が少ない、眺望がよい、高山植物が多い等静かな山旅をゆっくり楽しむことが出来る。

### コースについて

針ノ木峠をあとに蓮華岳の登りにかゝる、ジグザグ道を登りきれば蓮華岳の広々とした尾根である。深みどりの這松と駒草の薄くれないが白い砂礫に映えて進大な蓮華岳は美しく彩られ、のんびりとした雰囲気を与えてくれる。又展望は素晴らしく穂高、槍、表裏銀葉峠、立山

出来る。遠く富士、浅間、上信越の山等すべての山の展望台である。頂上は最南端で大きな指導標が2,798米の高度を示している。頂上から少し急な道を右に下る。ここは広い稜線であり道は踏あとをたどるので雨の日や霧には注意してもらいたい。駒草の群落を左右に下ると蓮華の大下りといわれる急な岩場の下りである。ちょっとしたスリルもあるが多少なれた人なら容易に下れてしまうが、初心者の安全の為に長い鎖が下げられている。この岩場を下りきった処に指導標がある。

この辺りにはカラ松の這ったものやオブジェ状になった木等があり、天然の盆栽を見るようで楽しい。このコルを北葛乗越といふ、天正12年佐々成政が越中から信州へ逃れた時、針ノ木峠を越えた説と、この北葛乗越を越えたという説があり、今日に至っても未だはっきりした事は解っていない。いずれにせよ蓮華岳も針ノ木岳も色々な歴史と伝説をもつ山である。大古の昔に思いを馳せここで一休みして山なみを眺めていると静かで自分が古人になったような境地になる事が出来よう。

こゝから北葛岳の登りである。岳樺のまばらな稜線をゆく。北葛岳の頂上が見えていて遠いが、だらだらな登りをゆっくり歩くことにしたい。頂上も近い処で道は信州側をまくようになる。この辺りは高山植物が多く、たかねいばら、とうやくりんどう、いわききょう等岩の間からそっと現れその美しさによっとすることがある。北葛岳頂上をすぎれば船窪小屋への半分以上をすぎたことになる。この辺で腹ごしらえをしたい。頂上からきれいな草地を下れば岳樺の中をジグザク下って北葛と七倉岳のコルになる。信州側が大きく切れ七倉沢は最上部が北葛岳の見ごとな岩壁に狭められている。こゝから急な登行となり最下部に、ハシゴがとりつけられている。小さなピークを三ツ程越えたと七倉岳の指導標が目につく。槍ヶ岳も大分近く望まれ今朝発ってきた針ノ木峠が郷愁をそゝる。こゝからの針ノ木岳は針ノ木谷を隔て堂々と聳り立ち、岩肌も厳しく実に立派である。船窪小屋への下降路は指導標から右下に下るようになっている。

船窪小屋は30人程収容出来るこじんまりした山小屋で

ある。小屋主は毎日訪れる数人の登山者の為に山菜をとり家族的にもてなしてくれる。雪の消えた後に出るあざみの芽を揚げたテンプラは珍味であり、疲れた登山者の舌を潤してくれる。又小屋には登山者の安全を祈る鐘があり、鐘の音は彼等に勇気と励ましを与えてくれる。紙

面の都合上記することは出来ないが七倉尾根を経て葛温泉へのルートもあり、針ノ木谷から黒部峡谷へのルートもある。又烏帽子岳への稜線縦走も静かな山旅を望む方には是非お進めしたいコースである。

(松沢宗洋)

## 唐沢岳 (上級)

カラサワ岳という一般には、赤いテント、黄色いテントと、たくさんのテントに色どられた、穂高のあの酒沢岳と間違えられるほど、穂高の酒沢岳の有名なのが分る。それだけに大町市の西麓、餓鬼岳の横に聳える唐沢岳の存在を知っている岳人は意外に少ないようである。

夏なお登山者の姿を見ることの出来ないこの唐沢岳は今までの登攀史にほんのわずかの名前しか残されないような山でもある。これは北アルプスの主脈の中にありながら、ほとんど前山の位置にあり、しかも森林限界が非常に高く、峻険をきわめておるので、昔から猟師も入らぬと言われ、この山への開発がおくれたためでもあらう。

34年私たち山の会での集中攻撃が行なわれたが、いまだその一部を知り得たに過ぎないほど、この山の峻険しさを知ったのである。

### 概要とアプローチ

唐沢岳、標高は2632.4mで餓鬼岳(2647.2m)の西北に位置し、その北面、西面は高瀬川、南面に東沢、東面には滝ノ沢にかこまれており、頂上附近から流れている沢に一ノ沢(東沢)、カラ沢、ヨタ沢(高瀬川)、野口沢(滝ノ沢)の四つの急峻な沢筋をもっている。そしてそれぞれの沢の間に西尾根、北尾根、東尾根が派出している。

大町駅より葛温泉、七倉行のバスにのると20分程もすると車は高瀬川左岸の路を素晴らしい景色と、スリルとを満喫しながら進む、約50分程で葛温泉に着く、七倉まではバスで5分、歩いて20分位で着く、ここからは船窪岳、或いは烏帽子、槍ヶ岳、三俣蓮華への起点となる

### 東尾根

七倉より10分位すると左手、木の繁みの中にわずかに索道を見ることが出来る、東尾根、ヨタ沢への唯一の入り箇所である。高瀬川を右岸に渡ししばらくするとヨタ沢の出合に出る。東尾根への取付はここから100米位上ったところに左手からA沢が出ている(砂防堤があるのですぐわかる)がこの沢をつめて尾根に出るものと、さらに2、3百米位登ると小さな滝に出るが、この左手を尾根を登ることが考えられる。この尾根はB沢岩壁の頭に出るものである。A沢を溯め東尾根に出ると小さな峯

を幾つも登り降りしながら、やがて空天を仰ぐかのような峯の下に着く、これがB沢の頭といわれる峯である。約百五〇米の壁である。ここを過ぎるとまた登陸の連続である。

2400mの北尾根とのジャンクションの下には約80mの草付の急斜面があり、これを過ぎるとひどい這松帯のブッシュコギを頂上附近までいや応なしに味わされる。

### 北尾根

ヨタ沢からのコースはヨタ沢中でも一ばん右の沢(D沢)傾斜は急で砂崩があるがザイル使用ならば大丈夫である。尾根筋に出ると粗林で割合歩きやすくなる。またカラ沢からの登路はカラ沢出合(東電神沢小屋より約40分)より30分位で右手に大きな滝が見えてくる。これが金時滝といわれる、ここは左手のガラ場を登ると滝の上に出ることが出来る。ここより沢筋に約一時間で驚滝に出る、落口の岩が驚によく似ているのでこの名前がつけられている。ここがカラ沢B沢であるがこの沢をつめることにする、右手には穂高のびょうぶ岩に決して優るとも劣らないような大岩壁(幕岩と云われる)が天空に聳え立っている。さてしばらく進み、右俣の滝を右にみながら尾根への急斜面にかゝる。

尾根へ出てしばらく登ると尾根筋に唯一の唐沢の田圃と云われる池がある、池を過ぎるとあとは急な尾根が東尾根のジャンクションへと続く。

### 西尾根

カラ沢から入るのが楽である(驚滝までは北尾根と同じ)、驚を過ぎると沢が二つに分かれるが左側をC沢、右側をDと呼ぶ、ルートはD沢に取る草付とガラ場の中を登る、右手にはもろい岩壁があり、常に落石に注意しなければならない。尾根筋は一ノ沢側が比較的ゆるやかな斜面である。トドマツ、シラビソなどの原始林が非常にきれいである。一般に帰路はこのコースを使うのが普通であろう。

### 溯行

いわゆる北面といわれる野口沢、ヨタ沢、唐沢は大きな滝の連続と、幾つにも分れている複雑な沢筋と風化したもろい岩、カラ沢をのぞいてはきわめて陰険で暗い沢であり、極度な高等技術を要求される。

なお、どのコースも初登では最低一泊のビバークをよぎなくされている。

(武田 睦男)

## 風吹大池

風吹岳は大池を初め小敷池、血の池、斜鉢池、と池塘を配した草原からなる。北アルプスの最北端に位し、とり残された景勝の地である。草原と湖のおりなすニュアンスは、むしろ女性的なやわらかな美しさと神秘的な感を与える。自然を心から愛する登山者に親しまれているこの地を、心ない登山者に荒されないように祈りつゝ筆をとる。

大糸線北小谷駅にて下車し、工事中の姫川橋を渡り左に道を取り、来馬部落の入口で右の風吹林道を土沢に沿って登る。広い道であるが登山者が少ないのでバスは通っていない。

北小谷駅より1時間30分で二俣に出る。林道は左手南俣に沿ってついでに二俣の500米先に近道があるのでこれを利用すると早い。20分程急坂をじくじく登れば又林道に出る。こゝから南俣北俣を左右に見ながらしばらく行くと林道がなくなり登山道となる。このあたりはブナ林で秋になると特産物であるナメコ茸がとれるブナ林を過ぎると道はやせ尾根となり、狐尻りに出る。今は修理されて安全な場所となったが、昔はこの辺りは道がけわしくて狐さえこゝから帰って行ったという挿話がある。しばらく行くと左下に硫黄泉の流れているのが見られ硫黄の強い臭気が鼻をつく。だらだらな登りを林の中にたどると清水が湧出している処がある。こゝで一休みして行こう。風吹岳の裾を斜めに登って行くと道は溝のような凹地となり、水芭蕉の大きな葉が見られ、前方が突然ひらけ風吹大池が静かに水をたゞえている。二俣より約3時間である。昔、地もとに乾ばつが続いた時農民達は神主をたのんで、風吹に登り大池の中の奇岩の上で神主に雨乞いをしてもらった。その時池の中から大きな竜が現われいつこへか消えて行った。翌日は大雨降りとなり、農民の危機は救われた。それ以来この竜は風吹大池の主として地もとの人々に伝えられている。左に草原台地右に樹やシラビソの針葉樹林、奇岩の素ばらしい岩壁に囲まれた静かな高原の湖といった感じである。こゝは訪れる登山者も少ないので荒れた処がなく大自然の美しくさを心ゆくまで楽しむことが出来る。湖の北側岸沿いに散歩道がある。大池とならんで奇岩に囲まれ

た中に小敷池がある。こゝがキャンプ指定地であり、大池に面した高層湿原のため水がしみるのでキャンピングにはマットレスを忘れぬようにしたい。又風吹には宿泊施設がないのでこゝで泊るには必ずテントを持参しなければならない。

小敷池の北には岩山に松が生い茂り、犬の巣とよばれる処がある。キャンプ地より大池小敷池の間を通過して樹林をぬけると大池の端に出る。凹地をしばらく奥にたどると草原の中に大小無数の池塘が見られ、血の池とよばれる池がある。気味悪い名称であるが色は雨水のように茶褐色に濁っている。イワイチョウ、モウセンゴケ、ムシトリスミレ、水芭蕉等の植物が見られる。又広い草原の中には神の田圃と呼ばれるところもあり、イ草があたかも人間が植えた如く整然と生えているところは、さすがに神の田圃である。いったん引き返して湖の右に廻って登ると草原の台地に出る。

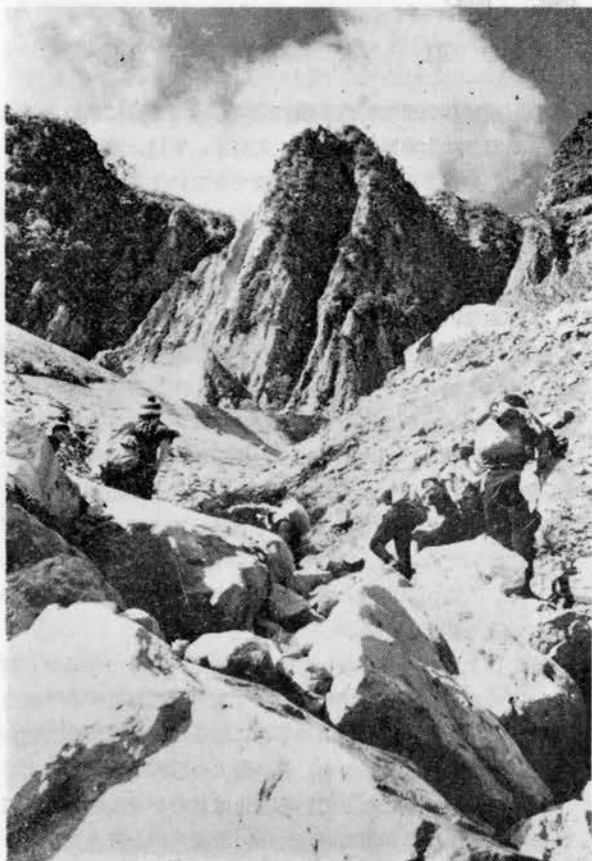
右下には松の枝間に斜鉢池が見える。こゝから見る大池の全景は実に素晴らしく、高原と湖が女性的な柔らかい神秘さを与えてくれる。いずれの湖も血の池をのぞいては水が澄んでおり水中にはクロサンショウウオやモリアオガエルが泳いでいる。

草原をしばらく行くと白馬大池方面への指導標が見える。霧が発生すると踏あとがないから間違いやすい注意が必要である。約15分程行くと蓮華温泉への道があるが近年この道は手入れされていないので廃道に等しい荒れ方である。蓮華温泉への降り口を右に見ながら尾根状の頭をぬって行くと、左下浦川の上流には大小の池が鏡のように見えてくる。又その下方には碑田山の崩落のあとが見られる。右手に草原台地が見えてくる。1944の独立標高点である。天候がよければ左から乗鞍岳、小蓮華岳、雪倉朝日岳の順に眺められる。はるか左下には蓮華温泉の湯煙を望むことも出来る三角点から道は一旦下ってふたゝび登りとなり、水芭蕉のある湿原を過ぎて小山に登りきれば天狗原の高台に出る。こゝで始めて岩場に冷水を得ることが出来る。風吹に天狗原や、神の田圃が在するようにこゝも同様高層湿原で大小無数の池が見られる。

指導標にしたがい右手の急な岩場を登りきれば乗鞍の台地に出前方に青く澄んだ大池が見れる。白馬大池は風吹大池より大きく山上の素晴らしい湖である。大池小屋は池の右手にある。こゝからは稜線沿いに白馬岳への道と蓮華温泉への道がある。蓮華温泉からは大所を経て大糸線平池駅に出る。又天狗原より道を左にとると樹池に出る。こゝから望む白馬三山の雄姿は素晴らしい。冬はスキーツアーのメッカである。樹池から広い登山道を下って赤ヌケに出る。

(松沢 宗洋)





にとると約1時間半位で大海川の取入口に着くこゝからは道はなく大海川を溯ることになる。石がすべるのでわらじを用意した方が行動もスムーズに進む、取入口付近では非常に広かつた沢筋も第にせばまり、だいぶ山奥へ入ってしまったんだなあという気がしてくる。約2時間もすると沢が急右折すると左手に小さな沢が出る、これが荒菅沢の出合である。これから上は大倉沢となり左手の小さな沢が、いわゆる頂上直下につながる荒菅沢である。黒滝を右に見ながらせまい沢を遡っていくとやがていくつかの小さな滝を越す。次第に視野も開けてくるとこゝから頂上直下の岩峯の偉容さに思わず目を見はるゴルジュ(兩岸のせはまったノドのようなところ)を過ぎると左右にカール状のストラップがありその上に、タテ竊岩壁がそゝり立っている姿に思わず感嘆せずにはいられないだろう。こゝは東南に位置しているので非常に明るく緩急さまざまな斜面は、中級者、上級者いづれにも向くような岩登りを楽しませてくれることだろう。最後の草付のがれを登ると尾根筋には小さな池があり、こゝから頂上へは急坂を10分位で登りきることが出来る

静かな山を楽しむために多少の苦勞をしてもと思う山である。

(武田睦男)

## 雨 飾 山 (中, 上級向)

登山口は新潟県側の梶山新湯から尾根筋を登るコースと、長野県側の小谷温泉から谷筋を遡って登るコースとがあるが、いづれにしても登山口までの巨りの長いことがこの山へ入る登山者を少なくしている原因ではなからうか。またこの山の名前のごとく、雷雨が多いのにおどろくことだろう、案外こんなところから出た山名のように思われる。

まず中・上級者向きのコースとして、大海川溯行コースで紹介してみよう。

### アプローチ

大町駅より大糸線中土駅にて下車、中土駅よりバスにするか、大町からバスにするかの二つの方法がある。バスの方がおそいが中土駅での接続のことを考えるより良いように思われる。大町より4時間ないし4時間半もかかるので、募営の場合は大海川取入附近、旅館だと小谷温泉の2軒があるのでこゝでゆっくり休みたい。

早朝に温泉宿を後にする。道は宿のすぐ裏から、湯峠への道を登る、途中鎌池といわれる池があるが、朝はそこ迄登らぬうちに軌道跡又は用水路があるのでそれを右

## 記念スタンプできる

山岳博物館を訪れた記念にと多くの観覧者から要望されていた記念スタンプがこのほどでき上ってきた。北アルプスに棲息しているカモシカに高山植物の女王コマクサと鹿島槍をあしらったもので、多くの観覧者に利用されることだろう。



## ヒカリゴケ 雑感

平林 昭一郎

光るコケにヒカリゴケ(蘚類)、ヒカリゼニゴケ(苔類)がある。前者にくらべ後者は一般の人たちにはあまりその名前が知られ所の水谷物研服部植究正でない。美氏によると、昭和33年熊本県人吉の鍾乳洞内でヒメジヤゴケに混生している、かなり強くオレンジ色をおびた金色に光っているコケを採集し、研究所に持ち帰り検鏡した結果、アジヤの熱帯に多いヒカリゼニゴケで、しかも日本新産の科のコケであることが確認された。その後ほかからの産地の報告がなく、したがって長野県下からも発見されていないためなじみがうすい。

これにくらべると前者のヒカリゴケは発見年代が古くしかも、日本では長野県で最初に発見され、小・中学校の理科の教科書或は小説等にとり入れられたため、名前そのものはよく知られているが、実物、または実際に光っている状態を観察した人はきわめて少いと思う。

本種について私は、さきに本誌上にそのあらましを書いたが、分類学上1科1属1種で、シベリヤ、欧州、北米、日本等北半球の北部に広く分布しており、これ以上進化するとのできないものとされている。天野研究所折井英治博士は、18世紀の終りころイギリスとドイツで初めて発見され、日本では明治43年、長野県岩村田の洞穴内で発見、以来今日では北日本に広く分布していると云われまた、熊本大学野口彰、名古屋大学高木典雄博士は、掘川博士によれば長野県大鹿村(35°30' L.N.)を最南限とし、北は北海道まで分布するが、東北地方からはその産地が知られていないことは非常に奇なこととされているを報告し、南西の限界を木曾御嶽と発表されている。

現在生育地の条件としては、日光、風雨が直接当たらない洞穴、樹根穴内等で光強度で直射日光の1/50~1/200、湿度90~100%湿度16~25°Cが最適とされている。高湿にはきわめて弱く、低温に対しては-0.20°C位まで耐えられる。以上のように限られた条件があるため生育地が自然に決り、さらに乱獲により年々減少の一途をたどっている。初めて発見された当時はごく身近で観察されたのが今日では全く影をひそめ、主として針葉樹林帯にその多くは安定した生育を営んでいる。

私は一昨年から本種の大町地方における分布について種々調査しているが、未完成ながら参考までに野帖からひろってみると(北アルプスを除く)、大正の初期から

昭和10年頃まで相当多量に生育し誰でも目にふれることのできた生育地が38カ所(大町9, 平11, 常盤12, 社6), 少量で注意しないと観察できない生育地が12カ所(大町2, 平6, 常盤2, 社2)の計50カ所であったが、現在は8カ所(大町1, 平3, 常盤2, 社2)だけとなりしかも、非常に少く注意しないとその存在がはっきりつかめない状態になっている。またこの生育地50カ所を3つに分けると神社寺院境内22, 人家附近8, 山地森林内20カ所で、現在は神社寺院境内3, 山地森林内5カ所に減少している。さらにこれを生育環境からみると岩石の空間内29, 石垣の空間内6, 樹根洞穴内15カ所となりおりこれが現在わずかに岩石の空間内7, 石垣の空間内1カ所のみ確認できるだけである。この減少の主な原因についてみると、自然の破壊力(風水害等)によるもの9, 人為力(乱獲, 森林の伐採等)によるもの29, その他4を数えている。

以上は今まで調査した概要のごく一部分であるが、調査の完了次第その詳細について本誌上に発表する予定である。とにかく50カ所の多きに達した生育地が約20数年間に1割となりしかも、その最大の原因は人為力による特に乱獲が主になっていることは見のがせない。これについて私は小学校の頃、近所の餓鬼大将と数人で学校の近くの神社へ行き、杉の樹根洞穴内に生えていたものを片端しから取り帰りに小さい土の塊をもらい押入れの内で黄金色に輝く光を見て得意になったことがあった。大体その場限りで翌日には全然光らない。母に話すと神様の霊がこの土にのり移りまたお宮へ帰るのだと話してくれ、こんど絶対にとってくるな、と云われたことを今だに記憶している。しばらくしてからわかったことだが、理科の教材にしようとして先生が子供に生育場所を教え取ってくるよう頼んだそうである。とんだ教材であり、今考えるとまことに惜しい気がしてならない。

こう言った減少はただ大町市のみにもみられる現象ではなく、各地でもこっており天然記念物の名のもとに保護されている例が多い。郷土で私たちの身近かに生育しているこのようなヒカリゴケはもちろん野生のフクジュソウ、サクラソウ、スズラン等貴重な植物は本当に良心的に保護しいつまでも存続するよう心がけたいものである。

(山博学芸員)

# 動物園日記

## ——カモシカ——

週刊朝日の最近号に日本でカモシカを飼育しているのは2カ所であるとでていた。

残念ながら本館はその中にはなかった。飼育年数からいけば満7年になる「岳子」が一番長いのではないかと思う。そして人にこれほど馴れたカモシカも他にはいないのではないかと。人は害敵にあらずの精神は幼体の頃から飼育したためかもしれない。

しかし野性の動物は年月を経るとともに野性味をとり戻すのが普通なのだが……。そしてこの「岳子」さんに飼育係も困らされる時がある。掃除に禽舎に入るとノソノソとついて来てゴミ取りにドカツと足をすえ鼻をすり寄せたり、ナメたりするので、仕事がかどらないからである。

7才になった岳子さんのために、いいムコサンは居な



子どもといっしょの「岳子」

いものかと我が子の様に飼育係は懸命である。いいムコサンの話しは是非ご一報下さる様にと、今日も子供を相手に生活しています。

(千葉林司)

## ゴジウカラ

長 沢 修 介

ずっと以前白馬岳の猿倉小屋でこの鳥の大声で嘔るのを聞いたことがあった。丁度5月の連休の時だったのでまだ雪が沢山残っており小屋の周辺は既に雪が消えかけている頃であった。ブナの大木の中であちこちからこの鳥のフイ、フイ、フイ、という大声が聞かれた。今年は春の山に入る機会が少なくついこの声を聞く事ができなかったが6月になって、近々この鳥に会う機会に恵れた戸隠での探鳥会の前日、あいにく午後から小雨が降り始めたがそれでも宿の周辺ではアオジやクロツグミの美声

ムシを捕えたゴジウカラ

が聞かれジジウカラやコガラが窓近く迄飛んで来た。部屋にいるのもったいない様な気がし、幸い雨も傘を必要とするほどでもないので外に出て夕刻の小鳥の声を聞いていると頭の上の杉の木で小さな声でささやきながら伸びつまじく餌をあさっているこの鳥の夫婦を見つけたこの鳥は他の鳥達と異って足の力が非常に強い。森林の木樵とさえ言われているキツツキの類でさえ木の幹を上るのに丈夫な足と強い尾が補助に用いられしかも上るだけで下ることはしないのにこの鳥は足の力だけで木の幹を上下自由に歩き廻る。良く見ていると幹に逆にも止ってもそんなに苦しくない様で軽々と平気で止りさかんに虫をあさっていた。きっと近くの洞にはヒナが親の帰りを待っているであろう。



### カモシカ舎新設予算議決

特別天然記念物カモシカを増殖しようとして上野動物園の浅倉、大島両係官が来館し種々討議された。その結果、本館裏に放養舎を新設し(既動物園計画の通り)その計画を進めて行こうと本館ではカモシカ放養舎用予算を議会に提出議決された、間もなく施設工事に着工する。

日本ではじめてのカモシカ増殖が試みられる日も遠くないことと思う

## 博物館だより

5月27日 野鳥の声を聞く会は朝4時30分に大町駅を貸切バスで出発、居谷里湿原の澄みきった朝の空気をすいながら、美しい小鳥の声に日曜日の一時を過した、参加者60名。

6月9・10日 全日本ワンダーフォーゲルは鹿島槍の麓大谷原で開催された。ちょうど梅雨時であり、雨に見舞われ全コースを歩くことはできなかったが、本館学芸員は自然面の指導にあたった、参加人員84校700名。

6月4・15日 野鳥標識調査は昨年度に引きつづいて行なわれ、両日は北安小谷村小谷温泉附近で行ないヒナ100羽に標識リングをとりつけた。

6月17日 八方・唐松日帰り登山は好天にめぐまれ、初夏の緑を満喫しながら残雪の山肌に若い歌声がこだまし、早や咲きだした高山植物の花々に楽しい日を過した参加人員53名。



## 資料寄贈

小六教育技術61-8 小学館、立正史学No17~23丸子巨、会報No61-6,7 登歩渓流会、兵岳連報 兵庫県山岳連盟、京都山岳 京都山岳会、岳友No62 岳友クラブ、岳友年報 岳友クラブ、わらじNo47 わらじの仲間、長野県山岳連盟報 長野県山岳連盟、山ひだNo10 千葉大医学部山岳部、国立公園No141 国立公園協会、自然科学と博物館 国立科学博物館、私たちの自然No57 日本鳥類保護連盟、比婆科学No57 比和科学博物館 地質ニュース 地質調査所、OMCレポート 奥多摩山岳会 (敬称略)

五月の初めに浦川入りへ登って見た。白馬岳の裏側は雪も多いし、植物も豊富でしかも訪れる人はきわめて稀である。おどろいたことはあの谷の入口、池原の部落からわずか登ったばかりの山腹に咲いていた山桜の花の大きかったことである。桜にも二百種類からの異ったものがあるとのことであるが、私は何という名称の山桜か、何種に属するかは全く知る由もないが今までこんなに大きな花の咲く山桜は見たことがない。

残雪の消えぎわにはコゴミが一面に芽を出している。手頃なものから摘んでリックにつめる、たちまちコゴミでリックは一っぱいになる。芽の小さなものは残して登る、ところが昼をすぎて元の道筋を下ってみると手頃の芽が一面にあるではないか、たしかに登りには小さくて摘み兼ねて残したはずである。それが1、2時間ですでに手頃に伸びている。

こうした現象は親の原へわらび取りに行った時にも気付いたことである

気温と、温度とそして水気や太陽の光線やら色々の条件で植物の成育の時間的研究というようなテーマを取り上げたら面白いことであろうと考えた。

博物館の仕事というようなものはとかく世間の人は妙な考えにとらわれている。館という建物の中に並べられた陳列物の骨とう的価値をみるというようなことが、まだまだ博物館に対する一般世間の人達の認識ではなからうか？、そうだとしたらこれは大いに認識を新にしなければならないと思う。植物の成育といえは難しいかも知れないがコゴミ取りやわらび刈りの中に我々の学ぶべき何かがあるとすればこれこそ実地の勉強である幸大町の山岳博物館はこうした方面にも力をいれて小鳥の声をきいたり植物採集の催しをしてきているが、生きた博物館こそ今後の社会教育にもっとも必要なものだと思う、たまには酒の醸造課程の研究などもあってはどうかと思う

(平林武夫)

## 私は思う

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料300円(郵送料とも)を現金書留または郵便為替、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第7巻第6号 1962年6月25日発行  
発行所 長野県大町市TEL(大町)211  
大町山岳博物館  
印刷所 大町市上仲町  
信州印刷大町工場